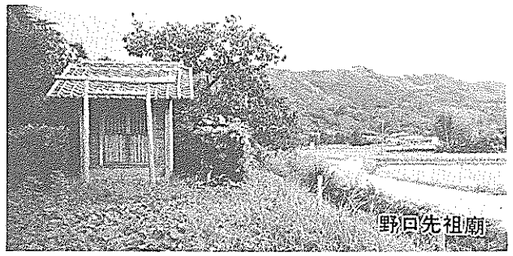
打ち刃物のふるさと久礼田

生き続ける職人魂


野口先祖廟

土佐の打ち刃物は、それはもともと刀剣鍛冶からの転進だけに、その切れ味の良さとずば抜けた耐久性、デザインで全国的にも有名です。

それは、鉈（なた）、鎌（かま）といった農林用具が主なものです。しかし、これもチェーンソーや自動草刈り機などの機械化の波に押されていましたが、今またそのすばらしさが見直されてきつつあります。

今回は〝打ち刃物のふるさと〟久礼田をたずね、いろいろな角度から取材してみました。

約四百年前……刀鍛冶からの転進

久礼田は土佐の打ち刃物の発祥地であり、ふるさとであると言っても過言ではないと思います。

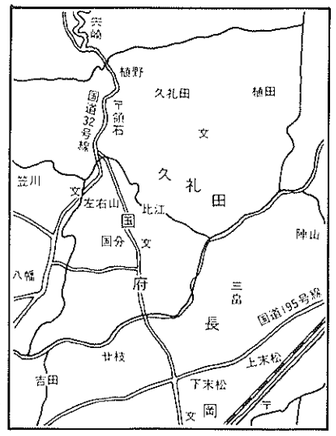
鍛造業者は、植田、久礼田、植野、領石などに二十社ほどあり、小規模ながら伝統と高い技術の中で、主に手造りの鉈や鎌を造っています。

これらは耐久性、切れ味ともに抜群で、全国的にも名高いのはすでにご存知のことと思います。

そもそも土佐に打ち刃物の技術が伝えられたのは、今から約四百年前の天正年間の後期で、豊臣秀吉が天下を平定して聚楽第を築いた頃だといわれています。土佐では、当時の領主長曽我部元親の時代です。秀吉の命により小田原征伐におもむいた元親は、帰国の途中に佐渡に立ち寄り、ここで刀鍛冶野口常左衛門の技術にほれこみ、土佐に連れ帰って、久礼田に住居を与え、藩の御用鍛冶として召しかかえました。ここで常左衛門は刀剣の鍛造に励む一方、付近の農民の願いを入れて包丁や鎌なども造ったといいます。

久礼田には野口家の先祖が祭られていますが、老人などの話によると昔はこのあたりにいいヌタがあり野口の先祖はこの地を選んだのではないかと言われています。ヌタというのは、鉄と鋼を接合する時に用いるどろ土のことで、刀鍛冶にとってはこれは大切なもの（今は硼酸（ほうさん）と鉄クズを接合剤に使用）です。

さて、時は流れ百年後の天明年間には、京都から来た小笠原円蔵という人がこの地で鎌を造り始め、ここで両派が腕を競い、品質の優れた今日の土佐鎌が生まれたと伝えられています。



このように土佐打ち刀物の歴史は今から四百年程前からということになり、伝統ある打刀物は刀鍛冶から伝わったものだけに、切れ味と耐久性は最高のものといえます。

時間をかけて手造りの味を

鍛造業界は過渡期

県下の打ち刀物の生産額は年額約五～六十億円で、南国市分はそのうちの約三割といいます。これでみる限りでは、鍛造業は規模は小さいが安定している職場といえましょう。しかし、最近はチェーンソーや自動草刈り機などが普及して、昔ながらの鉈や鎌などの使用が少なくなってきているのが気にかかるところです。また、今日では製鋼所で最初から鋼をサンドイッチして圧延した複合材の鋼板を購入して、それを打ち抜いて造る鎌や鍬などが多くなってきていることも同様です。手造りだとこの大量生産にはどうしても追いつけず、販売が伸びないということになってきます。

この点について地元の鍛造業者は、「鍬を例にとってみましても、手造りと機械化製品とでは違いがでてきます。機械化して造ったものはさびやすいし、土がつきやすいのが欠点です。これはいくら研いでみてもダメです。手造りの鍬は、よくたたきこんであるところから、決してさびたり、土がつきやすいというようなことはありません。やはり機械化するとなると手造りの味というものがなくなってきます。これは、板前の使う包丁も同様のことが言えると思います。鍛冶屋は、いかに切れる製品を造るよう、消費者に愛される製品を造るように努めるのが役割です。機械化した製品より、手造りの使いやすい製品のほうが消費者に好まれると信じて伝統を守っていきたいと思います。」ここでも、手造りに時間をかけて魂を入れている職人魂が生き続けていました。

しかし、いくら手造りといってもある程度は機械化することが必要で、重油バーナーや電気ハンマーの開発もして努力工夫してきています。

『これからは、〝どんな製品でもよい人〟と〝この製品でなければいけない人〟の二通りの消費者に別れてくると思います。〝手造りのいい製品を少なく造ってばかり〟では採算が合いません。かといって、〝多く造って安く売る〟のでは伝統をなくすことになります。これから土佐の刃物が生き残るためには、手造りのいい製品を造ることと大量生産することが共存しなければ、刃物の産地とはいわれないのではないでしょうか。過渡期と言われてここ久しいのですが、今が選択の時期ではないかと思います。」と語ってくれました。

昔から伝わる俚歌の中で、『鎌は弁弥太、切れるは清次、中で金とる良太郎』（鎌の形のいいのは弁弥太のもの、切れ味は清次、商売上手は良太郎）と、地元で鍛冶屋を称して歌われていたように、この問題は昔からあったことのようです。

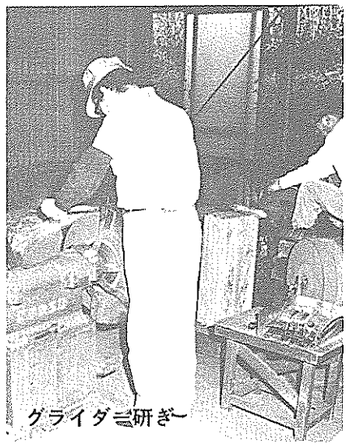
頭の痛い後継者難

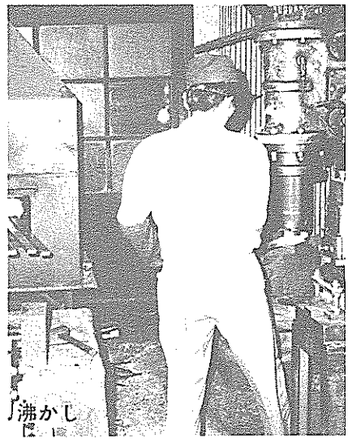
〝しばしも休まず
つち打つひびき
とびちる火花よ　走る温玉
ふいごの風さえ　息をもつがず
仕事にせいだす　村のかじや
あるじは名高い
はたらき者よ
早起き早ねの　やまい知らず
長年きたえた　じまんのうでで
打ち出すすきくわ　心こもる〟

現在は、いいものが見直されてきた時期でもあります。伝統とみがきあげられた土佐打ち刃物は、いつまでも残して、また地域全体で発展させたい産業です。

鍛造業界で、頭の痛い問題に後継者難があります。現在は四十～五十歳代の人が鍛造業に従事しています。これは、厳しい修業が要求される割には採算のないのが手造りもので、そんなところに若い後継者が育たないのが原因のようです。『このままでは、伝統ある鍛造業もなくなるかも知れません。若い人たちにはぜひ土佐の打ち刃物の火を消さないではしいものです。』とは、鍛造業者の真剣な悩みのようです。

昔から歌われている文部省唱歌に、〝村のかじや〟という歌があります。


グライダー研ぎ


沸かし

鉄の棒と鋼を炉で熱して、鉄の背を割り鋼を入れる。そして成形する。次に、グラインダーで荒研ぎとなる。ずいぶん手間のかかる仕事だが、これだからこそ切れ味が抜群の打ち刃物ができる。

焼き入れ…

鉛とり

刃物が切れるか切れないかは焼き入れで決まる。焼き入れはむずかしいとされていたのは温度の関係からである。現在は共同の熟処理センターで、鉛バスを使ってどんな温度でも一定に保てるようになった。780～800度である。鉛バスから刃物をあげると、鉛が付くのを防ぐためおがくずをかける。